

## 西高卓球部の思い出

六期生 内田 英彦

私の西高在校期間は昭和二十六年から二十九年までで、第六期生である。西高卓球部の創立世代は第二期及び第三期生であるが、私が入学した時は、このあとの第四期生が最上級生であった。

この時期には、西高の各運動部が一斉に相前後して創立されておられ、卓球部に限らず校内のいたる所に、創立期の旺盛なエネルギーが横溢していた様に思う。

最上級の四期生は、亀田、藤田、大橋、原田、甲子、竹内、三玉、加納、久保田、平川などの諸氏で、この年代は全員男子である。この一年あとが学制改革で男女共学となった第五期生で、男子には若山、中里、女子には斉藤、荒瀬の諸氏がいる。なお斉藤さんは卒業後三井生命に入社されて軟式全日本のチャンピオンになっている。

私の同期及びあと二期を列記すると次の通りである。(記憶洩れあれば陳謝、敬称略)

六期生男子 沼口、城川、斉木、中島、佐藤、杉浦、三

浦、松尾、内田

同 女子 佐藤、清水

七期生男子 加々美、河村

同 女子 正田

八期生男子 浜田、村田、遠藤、久米

同 女子 矢野

当時の西高卓球部の実力の程度は東京高校卓球界の上位中堅校位の所で、東京高校界が全国でもトップレベルにあったことからして、まずまずの強さであったと思う。ただ残念なことに、この頃からいわゆる受験地獄の時代に入っており、二年生の三学期からは休部するのが普通の状態で、その後も卓球を続けるのはむしろ特殊なほうであった。例えば、昭和二十八年二月に行われた東京都高校団体戦では、準決勝で負けて第三位となったが、この時のメンバーは、二年生の斉木氏と私、及び、一年生の加々美氏と河村氏の四人であった。準決勝では優勝した都立一商に三対二で敗れたが、この時の一商のメンバーは四人共三年生であった。

私の記憶する三年間の目ぼしい戦績は次の通りである。

斉藤嫌―インター杯代表、全日本ジュニア代表、関東選手

権代表

加々美氏―全日本ジュニア代表

内田、加々美組―関東高校選手権ダブルス代表

浜田氏―東京高校新人戦第二位

### 団体―東京高校団体戦第三位

当時の練習場は、校庭と中庭にはさまれた木造の体育館で、バレー部、バスケット部と共同して使用していた。ときおりバレーやバスケットのはずれ球が卓球台に飛びこんできて体にぶつかったり、ネットを引きちぎったりし、その度に練習が中断になり、大変苦労をさせられた憶えがある。

又卓球台のハズミをよくするために、古くなった運動靴の裏ゴムで力一杯台をこすってカラ拭きをする。そして、一年生の学帽で台をきれいに拭って仕上げをする。特に一年生の帽子を使う理由は、上級生の帽子は上拭きにするには汚れすぎているからである。

創立期には、われたボールに糊をはって又使ったり、ラケットを自分で作ったりする面白いエピソードが多い。私の頃もややよくなったとはいえ、まだ戦後の物質難の時代で、用具には色々苦労をした。或るときユニホーム用に父親の古い開襟シャツをせしめ、家の台所の洗面器で青く染めたところ、台所中が青くなって母親にえらく叱られたことがある。おまけにこのユニホームを着て練習したら体が青く染まってしまう、着かえた下着も青くなり、風呂の湯が又青くなり、で散々な目であった。

又運動靴がすぐへって裏側に穴があいてしまうので、古い靴のゴムで使えるところを切り取って、穴の場所にセメダインで貼りつけて使用したこともある。

食べたい盛りが食糧難時代であったので、弁当は二時間目の休み時間にカラになり、昼休みや練習後の飢えはもっぱら校内前の「日の出屋」のパンで凌いだものだ。

色々と思ひ出は尽きないが、矢張りここで一言荻村伊智朗氏にふれたいと思う。

荻村氏は西高第三期生で昭和二十六年に卒業され、都立大学に入学された。丁度私の西高入学とは入れ替わりである。

氏は都立大学での勉学のかたわら、当時吉祥寺にあった吉祥クラブに入会されて卓球をこころざし、西高体育館にもよく練習に見えられていた。練習態度はまことに真面目で、かつ峻烈なものがあり、練習中、氏の笑顔の一つ、冗談の一言も私は記憶にない。

又当時の無名時代から「自分は必ず一流選手になる」という気概と信念を持っておられた。従ってどんな練習でも、どんな大試合でも、常に自分を鍛えるため、強くなるためのものでしかなかった。

私は高校時代一度だけ練習ゲームで氏に勝ったことがある。そのあとすぐに十セット試合を申しこまれて、結局一セットも十本以上取れなかった。最終セットが終わったときは日が暮れてボールが暗くてよく見えなくなっていた。

冬休みに大晦日の夕方まで練習し、元旦は休んで二日に出ていたら荻村氏に大変叱られた憶えがある。ちなみにこの元旦の練習出席者は、荻村氏のほか私の同期の城川君一人だ

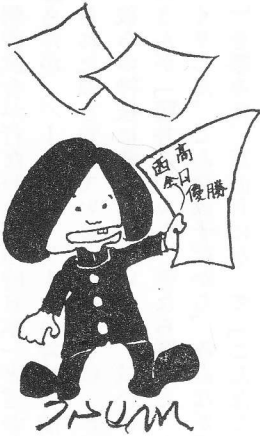
けで、二人で終日ボールを打ち合ったそうである。

荻村氏は昭和二十六年、当時ではまだ珍しかったスポンジラケットを駆使して軟式全日本選手権で優勝して一躍一流選手の仲間入りをはたし、翌二十七年日大に転校されて、その年の全日本チャンピオンとなっている。

その後の活躍はマスコミなどで報道されているので省略するが、氏のプレイヤー、指導者、論説者、役員、内外のコーディネイチャーと卓球界のあらゆる分野に於ての長年月に渡っての活躍は、ただ驚嘆するのみである。

私は少、青年時代の多感な時期に、この様な人に親しく接することが出来、一生の幸せこれに過ぎるものはないと思っている。

書きたい人、書きたいこと、思えばきりが無いが、最後に末筆ながら、当時親身になって我々卓球部の面倒を見て下さった藤崎、古川両先生に、不断の欠礼をお詫びし、満腔の敬意を表して筆を置くことにする。



## 白球に夢をたくして

七期生 加々美信光

早いもので、西高卓球部卒業後二十年以上にもなる。当時は、まだ戦後の苦しい時代で、ほかに何の楽しみもない若者が、小さな白球を追って夢中になっていた。風呂屋の鏡の前で連日素振りの練習をして気狂い扱いされた先輩が現実이었다。

小生が入学した頃は、すでに荻村さんは卒業されていた。まだ都立大におられた頃で、それ程世間にも知られておらず、よく西高にこられては、われわれを相手に練習をされていた。あのリズムカルなフォームに接するだけで、われわれもうまくなったような気になったものだった。この意味でもわれわれは非常に恵まれていた。

今、思い出しても、当時のわれわれは馬鹿みたいに夢を追いかけていたのだと思う。たしか、入学した年の昭和二十七年にボンベイで開かれた世界選手権で、佐藤さんがスポンジを駆使して、日本人ではじめて世界選手権を獲得した。その後、バーグマン、リーチのイギリス勢が日本を訪れ、日本勢は見事に返り討ちにあった。今の後楽園のアイス・スケ